「私たちは神の子ども」　　2025 年 12 月 05 日

そこで、子たちよ、御子の内にとどまりなさい。そうすれば、御子が現れるとき、私たちは確信を持ち、御子が来られるとき、御前で恥じることがありません。あなたがたは、御子が正しい方だと知っているなら、義を行う者も皆、神から生まれていることが分かるはずです。私たちが神の子と呼ばれるために、 御父がどれほどの愛を私たちにお与えくださったか、考えてみなさい。事実、私たちは神の子どもなのです。世が私たちを知らないのは、神を知らなかったからです。愛する人たち、私たちは今すでに神の子どもですが、私たちがどのようになるかは、まだ現わされていません。しかし、そのことが現されるとき、私たちが神に似たものとなることは知っています。神をありのままに見るからです。神にこの望みを抱く人は皆、御子が清いように自分を清くするのです。(Ｉヨハネ 2：28～3：3)

著者は、「そこで、子たちよ」と呼びかけ、「御子の内にとどまりなさい。そうすれば、御子が現れるとき、私たちは確信を持ち、御子が来られるとき、御前で恥じることがありません」と語っている。「御子が現れるとき」「御子が来られるとき」は、終末時の主イエスの再臨の時である。古代教会において、終末信仰はリアルに信じられていた。新約聖書の中で最初に書かれたパウロのＩテサロニケ書 4 章 16～17 節に「すなわち、合図の号令と、大天使の声と、神のラッパが鳴り響くと、主ご自身が天から降って来られます。すると、キリストにあって死んだ人たちがまず復活し、続いて生き残っている私たちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に出会います。こうして、私たちはいつまでも主と共にいることになります」と書いている。新約聖書の最後、ヨハネ黙示録 22 章 20 節には、「これらのことを証しする方が言われる。『然り、私はすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来りませ」と書かれている。主イエスの再臨による終末が、もうすぐ来るという終末信仰が彼らを支え、生かしていた。今日、絵画的に表現された主イエスの再臨の様子を信じることはできないが、歴史の終わり、終末への待望が「終わりから、今を生きる」信仰を確保しているのである。著者は、御子イエスが正しい方だと知っているなら、義を行う者も皆、神から生まれていることが分かる、そして、「御父がどれほどの愛を私たちにお与えくださったか、考えてみなさい」と言う。私たちが神の子と呼ばれるために、主イエスはご自分を十字架に献げてくださった。この愛を思い起こせと勧めている。

世が私たちを認めないのは、御父を知らなかったからである。私たちは、今すでに神の子どもであるが、自分がどのようになるかは、まだ示されていない。「しかし、そのことが現されるとき、私たちが神に似たものとなることは知っています。」協会共同訳は「神に似たものになる」と訳しているが、新共同訳は「御子に似た者になる」と訳している。「キリストが再臨される時、彼（御子）に似た者になる」と理解するのが正しいのではないか。パウロはローマ書 8 章 29 節で「神は前もって知っておられた者たちを、御子のかたちに似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くのきょうだいの中で長子となられるためです」と書いている。主イエスを長子とし、私たちを神の子の似姿にしてくださる。何と輝かしい望みではないか。著者は、再臨の時、御子イエスを目の前で見るから、御子に似た者になることを確信している。この望みにかけている人は、御子イエスの清さに与り、自分を清い者とする。「ヨハネ教団」において、終末を待ち望む信仰に立って、自らを清める生き方をするように励まし合っていたのである。